

## エッセイ2題

### 作家の実人生と作品

友達にも 恋人にもまた したくない

津島修治と 石川一

庭安野治男

2017年9月、朝日新聞の歌壇投稿欄に掲載された短歌である。選者はだれであったか忘れたが、思わず笑ってしまう一首であった。短歌を読んで笑う（川柳を除いて）事は大変に珍しいことだと思う。作者の機知に感銘してノートに書き記しておいた。

津島修治は太宰治の本名、石川啄木の本名は石川一である。

太宰は没後70年経った今も本屋に文庫が並び、ファンは根強く、国語の教科書に載っている作品もある。大学の卒論でも取り上げる学生は多いと聞いた。ことに若い読者層に人気があるようだ。石川啄木は明治時代を彩る多才の歌人であった。二人とも東北出身、文学史に名を残しているが私生活は惨憺たるものであつ

### 根来 濔子

たらしい。

太宰は明治42年、青森県金木町の、県下有数の大地主の家に生まれた。父は貴族議員も務めた地元の名士であった。母が病弱だったため、乳母に育てられたが、それがのちの傑作『津軽』に美しい描写で書かれている。東京帝大仏文科に入学したものの卒業できず、生活は荒れ、自殺未遂やら心中未遂を繰り返し（女性は亡くなっている）薬物中毒になったりして、結局昭和23年、愛人の山崎富栄と玉川上水で心中した。39歳。石原美知子と結婚した晩年の一時期を除いて、破滅的な人生だった。

石川啄木は明治19年岩手県生まれ。一歳の時に就職だった父が浜民村報徳寺の住職となったために移住。故郷浜民村を恋うる多数の名句を残した。若くして神童ともてはやされ、文学を志して上京。しかし就職ができずに帰郷。盛岡で新婚生活をするが、生活は困窮をきわめた。北海道を転々とするが、創作活動へのあこがれから、再び上京。『一握の砂』で世に出る。結核に侵され、26歳の若さで死去。中学時代からの友

人だった金田一京助や身边的人たちに金銭的な迷惑を  
かけまくった。ことに金田一京助は生涯にわたって生  
活の面倒をみたという。薄幸の歌人などとロマンチッ  
クな呼ばれかたをしている。(ちなみに私の父は旧制  
盛岡中学で啄木の8年下級生だったが、負のイメージ  
で思い出を語る人が多かったと話していた)。まさに、  
友人にも、恋人にもしたくない二人である。

作家は作品によって評価されるのであって、私生活  
がどんなに乱れていようと、作品に傷がつくもので  
はないのだろう。フランスの作家ジャン・ジュネはい  
くつもの犯罪を冒して刑務所に入った。しかし後世に  
『泥棒日記』という名作を残した。

永山則夫は4人を射殺して死刑判決を受けたが、拘  
置中に書いた小説『木橋』は新日本文学賞を受賞した。  
『無知の涙』など、多数の傑作を書いて日本文芸家協  
会の入会を申し込むが、一部の協会の理事により反対  
され、理事の間で論争が起こって文壇を賑わせた。1  
997年処刑される。

その他、明治の自然主義作家、近松秋江などを経て、  
戦後には無頼派と呼ばれる数多くの作家集団が登場し  
た。代表格の葛西善藏は太宰治と同じ青森県生まれで

北海道に渡ったり、一家をあげて上京したりと放浪す  
るが、妻の実家に借金を繰り返して、子供二人を親にあ  
ずけておいて愛人と同棲し、子供まで作っている。代  
表的な作品『子を連れて』では困窮のどん底にあつて  
周囲を巻き込んでも、文学に賭けるためには自分の貧  
困を描こうが、痴情を描こうが、そこに自分の生きる  
倫理があるという信念をもつてありのままを小説にし  
て「私小説作家」とよばれるに至った。私生活で迷惑  
をかけまくったのは啄木に似ている。晩年はアル中で  
筆を持つこともできなかつた。41歳で没。彼も破滅  
型作家の典型であろう。すばらしい作品を書きながら、  
自らの精神がむしばまれて悲惨な人生を送ってしまう  
のはめずらしいことではないのだ。

平成の現代、「私小説」は野暮なようである。スマ  
ートでしゃれた作品が多く、いまさらわが身を削って  
血を流すような小説など、読者はしらけるだけである。  
わずかに西村賢太が取り沙汰されているようだが、私  
は読んでいない。

身内に「私小説作家」が存在することも問題である。  
当然、多少の脚色はあるものの、作品のモデルとして  
描かれたりするからである。作家とモデルの関係は永

遠のテーマであり、モデルと称する人物がプライバシーの問題で裁判を起こしたりするのは珍しいことでは無い。

昭和6年生まれの三浦哲郎も自分の出自に作家としての原点を求めた一人である。三浦哲郎の本家は青森県八戸市で呉服商を営む旧家であった。母が青森県二戸郡金田一村から婿を迎えて分家をし、彼は二人の兄と三人の姉を持つ6人兄妹の末子として生まれる年。

しかし、6歳の時に次姉が津軽海峡に身をなげて自殺つづいて、長姉が服毒自殺。跡をついで家業を手伝っていた長兄が失踪。妹たちの不幸に耐えられなかったのだと言われている。家族は深川で事業をしていた次兄を頼り切っていた。末弟である哲郎の学費を出してくれたおかげで、彼は早稲田大学経済学部に入学できたのだが、その次兄も事業の失敗で失踪。両親と、三女の姉と末弟である彼が残される。彼は大学を退学せざるを得ず、郷里に戻った。短期間に二人の姉が自殺をし、二人の兄が失踪したのである。

彼を襲った怒涛のような家族の悲劇は三浦家に遺伝として伝わる「汚れた血」であった。

長女と三女は「先天性色素欠乏症」（俗に言う白子）という「暗い血」をもって生まれてきたのである。色

素を欠乏した頭髮と皮膚は真っ白で、視力障害もあり、いつもサングラスをかけていてその疾患は傍目にもそれとわかるものであった。長女と次女の自殺はそれが原因だと思われる。その「滅びの血」こそが、彼が文学によって救いを見出そうとするきっかけになったと次のように述べている。

「兄と姉が私に与えてくれた底のしれない恐怖と戦うことが、のちに私の文学志願のきっかけになった」と言うその恐怖とは、自分にも同じ「濁っている血」が流れていていざれ自殺か失踪をするのではというどす黒い不安。次兄の失踪によって学費が払えず、早稲田大学政経学部を退学して帰郷。中学の教師をして、親戚や世間からの冷たい目にとりかこまれて、肩身の狭い絶望の日々をすごしていたが、高校時代の友人Fに勧められて読んだ太宰治の『晩年』、井伏鱒二の『夜ふけと梅の花』に衝撃をうけた。

それまで夏目漱石の『坊ちゃん』しか読んでいなかった彼はFとの出会いによって文学に目覚めたのである。Fと出会わなかったら文学とは無縁だったろうと述懐している。やがて作家になるという志をもって再び上京。早稲田大学仏文科に再入学する。妻となった女性との出会いと結婚をえがいた『忍ぶ川』で昭和

36年度の芥川賞を受賞した。自分の出生の闇と向き合い、一人の女性との愛によってそれを克服するまでを描いた私小説である。いかにも純文学らしい美しい文章で、不幸を否定的に描くのではなく、それを乗り越えていくとする強い意志は爽やかであり読者に感動を与えた。当時純愛物として映画にもなった。実直な人柄が文面から立ち上ってくるような「自己肯定」にいたる道筋は彼が高校時代スポーツマン（バスケットボールに熱中していた）だったことによると思う。

短編小説『恥の譜』をはじめとして集大成ともいえる自伝的な長編小説『白夜を旅する人々』（大仏次郎賞受賞）で克明に自分の出自を描いている。その他、東北を題材にしたロマンを扱っていくつかの賞を受賞し、芥川賞の選者にもなり、芸術院会員となった。2010年79歳で逝去。

私の郷里は岩手県である。12歳年長の姉は青森県八戸市の開業医に嫁いでいた。姉の娘、すなわち私の姪に、市内の「M」デパートの長男との縁談があった。戦前は呉服商だったが、戦後「M」デパートとして栄えていて、八戸で有数の大きな店であった。申し分のない縁談だと思われたが、相手の家系に遺伝因子の

「汚れた血」のあることが問題になった。「M」デパートは三浦哲郎の自家である。彼が作品の中で繰り返し書いた出自の遺伝が障りとなったのである。世間に伏しておきたかった三浦家の家系にまつわる恥部を、小説とはいってもほとんどがノンフィクションのような形で書かれていて、世間に暴露されたことが親せきの者たちの眉をひそめさせていた。

文学に無関心な医者である義兄は、「M」の家系を調査したが、遺伝子疾患の「血統」は三浦家直系に伝わるものではなく、養子に迎えた金田一家のものであるという結論に達し、この縁談を受け入れた。結婚式は八戸の大きなホテルで華々しく行われた。私も出席したのだが、三浦哲郎の姿もあつた。彼はスピーチの席に立った。全く記憶にないところを思えば、当たり前のない祝辞を述べていたのだろう。背が高くて柔らかな雰囲気、人柄のよさを思わせた。かつて、「呪われた家族」として親戚からつまはじきにされ、一族の恥さらしだと非難された時期もあつたが、いまや、高名な流行作家である。身内の結婚式で祝辞をのべる立場になったことは彼にとつても考え深いものがあっただろう。彼はついに故郷の名士になったのだ。奈落のどん底を経験した母親は晩年、彼の家を訪れて穏や

かな日々を過ごしたようである。

三浦哲郎は40年ぐらいい前、私の住んでいる秦野市で講演をしたことがある。娘が中学生の時、PTA活動の一環として学校が講演を依頼したのである。細部はほとんど忘れたが、ただ一つ克明に覚えているのは次のように言った言葉である。

「私もし太宰治だけに傾倒していたなら、現在のようない小説家にはならなかっただろう。太宰と同時に井伏鱒二を師としたことが私の人生をデカダンから救ってくれた理由の一つだと思っている」。

三浦哲郎の筆致には捨て鉢な絶望がない。太宰をふくむ無頼派の作家にありがちな自堕落がなく、常に生活は地道で家庭を愛し、常識的な人生を全うした。最近目はまぐるしく流れる文壇の中にあつて、書店の棚で彼の作品を見ることがなくなつて寂しい。ブームが起きてほしいとは言わないが、私小説作家のひとりとして読み継がれてほしいと願っている。

\* \* \*

作家森村誠一は『作家とは何か、小説道場・総論』(角川グループパブリッシング刊)で作家を九つのタ

イブに分けているが、「破滅型作家」について次のようなことを書いている。興味深いので引用してみる。「破滅型。およそ小説を書けるような環境ではないところに自分を追い込まないと書けないタイプ。流連荒亡、紅灯の巷に身を置き、果ては乱酔して時には暴力沙汰におよび、心身を痛めつける。このタイプは一人では出来ない。これを支える、あるいは破滅型を助長する女性陣、編集者、出版社の存在が必要である。今日、このタイプはほとんど絶滅している。社会のシステムが破滅型をゆるさなくなり、破滅型女性陣と、編集者がいなくなったからである。」

(2018年 9月)

## 病に寄り添う

40代のころ、私たちおしゃべり仲間をよく言っていた。「だからだと、長生きはしたくないね」「ほんと、うちの母なんか、80歳だけど、ボーっとして何が面白くて暮らしているんだか」。あれから40年、綾小路きみまろではないけれど、母の年齢を超えた今、「お互いに身体に気を付けて長生きしようね」と励ましあっている。若いころ、とても60歳までは生きられないだろうとおもっていた。80歳の自分を想像できなかつた。それがいま、日々新たに老いの新境地を体験することになり、医学の進歩、健康に対する社会的意識の高まりの恩恵をうけて、私自身、長寿の世界に突入しそうである。

まさに世は健康ブームである。テレビや雑誌など、メディアは売らんかなの商魂で、健康器具やらサプリメントやら、若返りの化粧品やら、とりあげる商品の多いこと。それに踊らされる我々がいるから商売は成り立つのだろう。それらを常用していればいつまでも若返っていられるような錯覚さえ抱く。酷暑の夏、6

室ある我が家でエアコンが設置してあるのはテレビのある一室だけ。その部屋に閉じこもり、ソファに寝そべり、日がな一日ぼんやりとテレビを見ていたので、過剰なまでのコマージュナルに、今更のように驚いてしまった。人生100歳時代というのが、健康寿命でなければ意味がないのだから、身体ケアのためにも尤もな事であろう。

夫の仕事の関係で、親戚も知人もなく、まったく未知の土地に住んで50年になる。おまけに結婚前に住んでいた東京都心から電車で1時間20分の距離、当初、周囲は畑が多かつた。更に、60歳で夫を亡くしたので、孤立無援、そのころから私は孤独に強い人間になつたのだと思っている。しかし、2人の子供を育てることにより、地域との様々なつながりができた。学校のPTA活動に参加することで、同年配の友人も多くなり、趣味のグループで交友の輪はひろがった。

ことに友人Yとは、いまや40年に及ぶ交友関係にある。同じようにサラリーマンの主婦であり、子供も同年齢だったので、気の許しあえる関係となつていった。そのYが、2、3年前から身体の不調を訴えるようになった。下半身に力が入らず、足が重くて歩きにくという。休憩しながら、少しずつしか歩くことがで

きないとこぼす。二人でよくショッピングや、小旅行に出かけていたので私にとつても重大事である。近所の整形外科を2軒、はしごをして診察を受けたがどちらの医院でレントゲンをとつても異常は見つからないということだ。しかし、明らかに不調の自覚はある。

彼女はインターネットで検索し、自分の病気は「ロコモティブシンドローム」ではないかと自己判断をした。ロコモとは、骨、筋肉、関節、じん帯などの器官が衰弱して要介護になる危険が大きいという恐るべき病である。彼女も私同様、夫を失って一人暮らしをしており、遠くに住んで家庭を持つ子供に迷惑はかけられない。寝たきり病人になつては大変である。足腰が強くなるというサプリメントを何種類か買いまくった。たくさん飲めばどれかは効くに違いない。私も応援して情報を提供した。また、筋力を鍛えるのに効果があるという健康ジムにも通つて、若いインストラクターのお姉さんの指導を受け、彼女なりの努力をする。ついでこの間まで人並みに歩いていたのに、なにが原因でこんな悲惨なことになつたのか。夜な夜な電話で愚痴を聞かされることになつた。毎日の生活に支障をきたしているのだから無理もないが話題はいつも病気のことで。私も気が重くなつてきた。

どうも町医者は信頼できないという疑念がわき、設備の行き届いている大学病院を受診したほうがいいのではと二人で話し合った。病院は複数の医者が診断してくれるだろうし、最新の医療器械を整えている。周りの人たちのロコミやら、確かな筋での情報やらで、整形外科の最高の權威はK大学病院だという結論に達した。都内にあるその病院は整形外科に限らず、あらゆる分野で高名であり、もちろん紹介がなければ受診できない。しかし、幸いなことに知人のコネを介してやつとその機会を持つことができた。

「K大学病院は医学界の最高の權威なのだから、信頼して診断には従わなければだめよ」と私も後押しをした。「もちろんよ、もうお医者さんのかけもちには飽きたから、これが最後だと思つて全面的に従うわよ。手術をしてもらつて、この状態からすつきりと解放されたいわ」彼女も晴れ晴れとしていた。

かくしてK大学病院に2泊3日の検査入院をした。費用は10万円余だったとか。

2週間後に結果を聞きに再び病院を訪れて、おもむろに下された診断は「脊柱管狭窄症」であつた。私の他の友人にも同じ病名を持つ人が何人かいる。病名は同じだが身体に現れる症状は多様で、腰や背中、脚など

に痛みを持つ人が多い。彼女のように、座っていれば問題がないが、下半身が重くて、歩きにくいという程度の人はあまりいない。3か月分の薬を処方され、3か月経ったらまた来なさいという、あっさりしたものだ。拍子抜けのするような診断で喜ぶかと思いい、「大したことがなくてよかったわね」などと言ったのだが、彼女は侮辱されてもしたかのような脹れっ面で「こんなに重篤な症状があるというのに、3か月も放っておくなんて。こんな飲み薬で治るとはとても信じられないし、同じ薬を3か月も飲んで、副作用でもあったらどうするのか。」またはやむくむくと疑念が湧いてくる。薬の身をインターネットで調べる。薬は飲み続けることによって副作用が生じ、かえって身体に害をあたえることがマスコミで問題になっているのだ。しかしK大学の病院の処方だから、従わざるを得ない。ほかに行くところはないのだ。結局彼女は町医者の勧める小さなリハビリ病院で、関節をきたえるリハビリに励むことになった。その間、2度ほど自宅を訪問してお茶をしたのだが、少しの間音信が途絶えた。

1, 2か月たったのだろうか。夜、電話があった。また愚痴を聞かされるのかと構えたが「ひさしぶりねー」などと、声は意外に明るい。「その後足の具合はどうなの」と心配していたことを聞く。「あまり代わり映えないのだけれど、もうあきらめたの、これは病気というよりも、年齢とともに確実に進行していく老化のせいだということがよくわかったの、もう治るわけがないということも」「そうか、もう治らないのか、お医者様がそういったの?」「ううん、本に書いてあったの。それで納得したの、あなたも読んで御覧なさい」と弾んだ声で紹介してくれたのが『すごいトシヨリ BOOK』(池内紀)である。

『すごい トシヨリ BOOK』(池内紀)には「トシをとると楽しみがふえる」というサブタイトルがついている。老人向けの書物は、佐藤愛子の『90歳、何がめでたい』がブームになったし、数えきれないほど出版されている。五木寛之や曾野綾子など、高名な作家の数冊を読んだが、それぞれの個性に即していて同感しては見ても一般的であまり印象に残るものではなかった。ドイツ文学者であり、東大の教授でもあった池内紀もついにこのようなテーマについて書くようになったのかというのが率直な感想だった。

2017年発行の本だから、1940年生まれの作者が77歳の時の作品である。大変に読みやすく、ユモラスで笑いをさそう。「はじめに」で作者は次の



ようにいつている。「70歳になったとき、77歳の時にはもう自分はいないという予定をたて、(普通は生きていることを前提に予定をたてるが、自分はもういないという前提のほうが行動しやすいと思った)その間にやりたいことを行動する、77歳になったときには、いなくなる時を3年ずつ延長して、その間の計画を立てるというものだ。作者はそれを「3年延長説」と呼ぶ。そうして老人になって気づいたことを率直に、前向きにとらえて書き留める。例えば「急に茶碗が手から落ちたり、ものにぶつかったり、自分の動きと目の前にある物の配置のピントが合わず、思ってもみないことが起こる。読みたいと思っている本が、あると思っていた場所がない、そんな出来事に遭遇することが老いととも増加する。それを老いがやらかしたことで、周りの者がからかっていると考える。老いていく自分に目を背けることなく、変化を受け入れる」こと。

「老いには寄り添え、病には連れ添え」というフレーズが友人の琴線にふれたようだ。特殊なことが書いているわけではないが、年齢とともに身体の器官は衰えていく。病によるものではなく、老化によって「昨日できたことが今日はできない」のは当然のことなのだ。

だ。治すことができない医者が無能なのではなく、人間の自然の摂理に従って変化しているだけなのだ、何軒も医者掛け持ちしても回復しない自分の不具合を納得したのであった。

自分の現在の能力に合ったような歩き方をすればいい。歩きにくかったら休めばいい。「死というものは恵みであり、古いものが、新しいものと入れ替わる非常に大切な季節の変わり目のようなもの」「老いの問題については、老いていく自分が一番くわしい、素材は自分であり、教材が目の前にあるのだから、自分の老いを通して学べる場というものはほかになく、自分のスペシャリストになれる」のだという。

「老いの旅」の章ではユニークな話題を提供している。老人夫婦が旅行する場合は出発時から一緒だと家庭が移動しているだけなので話題がとぼしい。宿の食堂で老人夫婦が黙々と食事をしている風景はわびしいせめて二人、出発時間を変え、宿までのルートを別々に行動し、途中で起こった経験を、落ち合った宿でお互い、生き生きとはなしあえるようにしたら、という尤もな提案をしている。長年連れ添って会話もなくなった二人のせめてもの刺激である。夫を持つ私の友人なども、旅先で迄夫の面倒は見たくない、友達同士の

旅のほうが楽しいとよく話しているから、家庭の延長のような旅は気が進まないのだ。具体的な例をあげて書いているから一気に読ませるものがある。友人は『すごい トシヨリ B O O K』を読むことよって開眼したのだから、本の力は大了なものだと感じ入った。

友人Yと私は近場のレストランでランチを楽しんでいる。おいしいパン屋が開店すればゆっくりと散歩がてら出かける。相変わらず彼女は足が重く、少し歩いでは休む。いつのまにか、私にも同じ症状が現れて、二人ともものんびりと季節を味わいながら田舎道を歩いている。不思議なことに物欲がなくなつて、ワクワクして出かけたデパートも、歓楽街の温泉も、いまやほとんど魅力がなくなつてしまつた。老いに寄り添っているのである。人生いかなる時も未来は未知である。結婚という未知の世界に飛び込んで、子供を産むという感動的な体験をした。彼らは巢立つていつて、私たちとは違う人生を歩いている。これから私は老いという今まで経験したことのない景色を眺めることになる。

「シルバー川柳」というのがあつて、全国有料老人ホーム協会が毎年、川柳を公募し、敬老の日に発表している。思わずニンマリするような名句があるので、

4句をあげてみる。

日帰りで 行つてみたいな 天国へ  
なぜ消える 眼鏡と鍵の ミステリー  
つまづいて 足元みれば 何もなし  
忘れ得ぬ 人はいるけど 名を忘れ

(2018年 9月)

